

令和3年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果

1 調査の目的

- (1) 国が全国的な子どもの体力の状況を把握・分析することにより、子どもの体力の向上に係る施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 各教育委員会が自らの子どもの体力の向上に係る施策の成果と課題を把握し、その改善を図るとともに、子どもの体力の向上に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。
- (3) 各学校が各児童生徒の体力や運動習慣、生活習慣等を把握し、学校における体育・健康等に関する指導などの改善に役立てる。

2 調査対象とする児童生徒

(1) 小学校調査

小学校、義務教育学校前期課程及び特別支援学校小学部の5年生全員

(2) 中学校調査

中学校、義務教育学校後期課程、中等教育学校及び特別支援学校中学部の2年生全員

※特別支援学校及び小中学校の特別支援学級に在籍している児童生徒の参加については、その障がいの状態等による。

3 調査内容

(1) 児童生徒に対する調査

ア 実技に関する調査

[8項目] 握力、上体起こし、長座体前屈、反復横とび、20mシャトルラン（中学校は持久走との選択）、50m走、立ち幅とび、ソフトボール投げ（小学校のみ）、ハンドボール投げ（中学校のみ）

イ 質問紙調査（運動習慣、生活習慣等）

(2) 学校に対する質問紙調査

- ・子どもの体力の向上に係る学校の取組等

4 調査実施期間

- ・実技調査実施期間：令和3年4月から7月

5 調査実施校数（国立・公立、私立）

30,300校（小学校19,725校、中学校10,575校）

6 大分県児童生徒の状況

(1) 調査校数・児童生徒数（公立）

- ① 小学校（248校、男子4,878名、女子4,771名）
- ② 中学校（121校、男子4,625名、女子4,249名）

7 全国体力・運動能力、運動習慣等調査の結果（概要）について

（1）体力合計点による全国順位【資料1】

- ① すべての対象学年において過去最高の順位であった。
(小学校5年男子の全国1位はH30以来2回目)

（2）体力合計点の状況【資料2】

- ① すべての対象学年において全国平均を上回っている。
- ② 本県、全国ともにH30をピークに低下傾向だが、前回（R1）との下げ幅を全国平均と比較すると、すべての対象学年において本県の下げ幅は小さい。

（3）各調査項目の結果【資料3】【資料4】

- ① すべての対象学年において、すべての種目で本県は全国平均を上回っている。
- ② 過去最高値は、中2男女の長座体前屈、中2男子の立ち幅とびであった。

（4）体力総合評価【資料5】

- ① 総合評価がC以上の児童生徒の割合は、すべての対象学年において全国平均を上回った。
- ② 本県、全国ともにH30をピークに低下傾向だが、前回（R1）との下げ幅を全国平均と比較するとすべての対象学年において本県の下げ幅は小さい。
- ③ C以上とは逆にD・E層は、すべての対象学年において増加傾向である。

（5）児童生徒質問紙による調査結果【資料6】【資料7】【資料8】

- ① 運動やスポーツへの愛好度は、「好き」「やや好き」と回答した割合が、すべての対象学年において全国平均を上回った。（小5女子で全国平均を上回ったのは初）
- ② すべての対象学年において愛好度は前回（R1）と比較すると下がっている。
- ③ 愛好度について前回（R1）との男女差を比較すると、全国平均ではすべての対象学年で広がっているのに対して、本県は差が縮まっている。
- ④ 1週間当たりの運動実施時間は、すべての対象学年において全国平均を上回ったが、H29をピークに3年連続で減少している。
- ⑤ 1週間当たりの総運動時間60分未満の割合は、すべての対象学年において全国平均を下回り、中2女子は過去最低値であった。

8 分析

- ① 本県の体力は、全国と比較すると高い水準にあるものの、H30をピークに低下している。これは、コロナの影響により体育授業や体育的活動の運動の種類や量の制限、運動部活動の活動停止など、体力向上の取組が減少したことが考えられる。
- ② 愛好度の低下についても、体力と同様にコロナの影響があったと考えられる。

9 総括

- ① 本県が全国と比較して高い水準の値を示しているのは、これまで小学校体育専科教員や中学校体育推進教員を中心に、学校が組織的に体力向上に取り組んできた成果と考えられる。とりわけコロナ禍にあって、ともすると運動をすべて止めてしまいがちな状況の中、感染防止対策を徹底しながら様々な工夫を凝らした授業や活動を校内や地域に「点から面」へ広げることにより、多くの先生方が体力の向上に積極的に取り組んだことが、体力の落ち幅や愛好度の低下を極力抑えることにつながったと捉えている。
- ② 本県の体力は全国と比較して高い水準にある一方、体力は低下傾向にあることに加え、これまで課題としてあげていた体力の「二極化」や愛好度の「男女差」も依然として現存していることも明らかとなった。今後はこれまでの取組を検証し、更に継続・発展させていくことが重要である。具体的には、運動・スポーツ好きの子どもたちの育成を目指した体育授業や「一校一実践」の工夫・改善の取組をより一層推進していく。